

CSW68 体験記

山内彩

【謝辞】

この度 CSW68 に派遣させていただく機会を提供していただいた、JAWW および KFAW の皆様、現地の滞在場所を確保してくださった小川さん、そして CSW の存在を教えていただいた Garden of Hope Foundation の皆様に誠に感謝を申し上げます。以下、3/10～3/16 の渡米期間で感じたこと、経験したことをまとめました。これからも暴力や女性・女子に関わる問題に従事し、平和な社会を目指し力を尽くします。

何度もカードを差し込んで出でこなかった、地下鉄乗車用のメトロカード。初めての機械に不慣れな私に、いきなり年配女性に声をかけられ、買い方を教えてと言われたので、アドリブで説明した。その後乗車に迷いながら寒風と土砂降りの中、なんとか寝泊まり先に到着した3月10日。CSWは私にとって初めてのニューヨークだった。

しかし、CSWへの参加は遡れば2020年から考え始めていた。中学の時、校内外で進んでいた、デートDVおよびセクハラ・性暴力のプロジェクトでご縁があり、NGOCSW65（2021年）にパラレルイベントの登壇者として参加させていただいた。当時は“Women's full and effective participation and decision-making in public life, as well as the elimination of violence, for achieving gender equality and the empowerment of all women and girls”がテーマだったため、性暴力・セクハラ防止に関連した自分の団体を紹介したり、他国の女性活動家とトークをしたり、充実した時間を過ごせた。オンライン開催であったのに関わらず、登壇後多くの方々からメッセージをいただいたのを覚えている。オンライン参加でも満足していた私だったが、対面でより多くのイベントに参加し、活動家、起業家、アドボケイトと交流したい思いが、画面越しの活気を感じたからこそ一層強まった。高校生になってから本派遣制度を知ったが、CSW期間が定期テストと重なることもあり、受験後まで待ち、終われば必ず参加できるというモチベーションで学業をこなし続けた。



【サイドイベント① 優先テーマに対する気づき】

CSW68の優先テーマは貧困が中心だった。私は暴力から身を守る女性の権利とテクノロジーの架け橋を目標としていたため、関心分野から若干離れていたものの、知識を深めるためにも、サイドイベントや全体会議で議論される女性の貧困問題に耳を傾けた。いざ会場の個人スピーカーを着用した私は、今まで強固に紐づけていなかった貧困の交差性に気付かされることとなった。

例えば、ラトビアのサイドイベントではラトビアの首相が登壇されたのが非常に印象的だった。DV被害者を支援するシェルターの立ち上げのお話をされ、貧困家庭がより暴力の被害を受けやすい立場であることから、経済的なGBV対策を導入するよう訴えた。私は暴力に注

目しがちだったが、現場の立ち上げから実行まで携わった首相の実体験を通して、貧困は女性とその家族の安全と安心を脅かす最大の要因であると自覚できた。

また、貧困から脱却する過程でも暴力に晒される危険性があることを知った。

UNESCAP 主催のサイドイベントでは、農村地帯の女性が自ら財力を高めようと、売り場に行く途中で暴力にあってしまう現実が共有された。貧困は貯金にも影響する。毎日さつまいもを一個売り続けた彼女は銀行口座を作るための ID や書類がなかったため、家の中に隠していた。しかし、いざ子供を学校に行かせる費用を貯めたと思いきや、親戚が全部盗んでしまったのである。身内同士で起きていることから、互いを金銭的にサポートする余裕すらないと察した。このように、貧困は暴力の引金であるとともに、間接的な暴力も引き起こすのであると、新たに発見できた。また、こうした女性の経済的自立という点では、いかに日本の体制が万全なのかを改めて感じる事ができた。

さらに、このイベントの目的であった、女性の経済的なレジリアンスや包括性に関する UNESCAP の報告書の発表では日本への言及もされた。日本の成果として挙げられたのは、女性起業家を 20%増やし、リーダーシップの立場に女性を置く目標を掲げたり、経済産業省がなでしこブランドのような女性エンパワメント関連の企業を応援したり、またジェンダーに基づく暴力を優先的に扱うプランを立てるなどである。「それだけか」と私はつい思ってしまった。目標や計画はいくらでも立てられるが、それらを遂行する力がない限り、机上の空論になる。よって、日本女性の経済的自由と平等が国際社会に評価されるには、政府もちろん、私を含めた市民社会の意識改革も必要であると考えた。

【サイドイベント② あらゆる暴力の防止について】

事前に、私が一番期待していた暴力を受けた子どもの擁護に関するサイドイベントにも出席できた。国連本部から歩いて 20 分ほどにある、北欧諸国の展示が行われているスキャンディナビアハウスの地下にて、子ども関係の国際機関やブルキナファソ、ポーランド、オーストラリア、西アフリカ、およびトルコからきた登壇者による対談が行われた。各登壇者はよりよい子どものケアを実現するために打ち出されている具体的な政策やプロジェクトの成果を発表された。特に印象的だったのは、保守的だった内閣を改革し、性別問わず育児休暇のアクセスを拡大させたポーランドの話だった。ジェンダー平等の推進においてヨーロッパは先進的なのではないかという先入観を持っていたが、日本と似たような課題を直面していることに気づき、連帯感が増した。その他にもトルコでは、父親への育児教育が積極的に行われていることに驚いた。流されたビデオでは父親同士で互いの問題意識を共有し合うプログラムが効果的だったと言う。加害者支援プログラムは国境を超えて重要視されていることに、暴力を根本から解決しようとする人間の普遍的な心を感じた。

また、咄嗟に参加したもので期待を超えたイベントにも出席できた。それは、UN Women の代表理事が登壇されたオンライン環境で起きる女性への暴力についてのイベントだった。昨年の CSW のテーマと関連したため興味深く聞いた。何列もの女性が立ち見する中、後部から理事長をギリギリの角度で見ることができたのだが、彼女を含めた UNICEF, UNFPA のスピーチは鼓膜を震わせ、力強いインパクトを残した。彼女の SNS にくる誹謗中傷への問題意識やデジタル社会に潜むミソジニーを取り除くための取り組みを強調された。

【サイドイベント③ サイドイベントを通して得た学び】

こうしたイベントへの参加を通して得た最大の学びは、海外の人は声を上げ、連帯意識を作る能力が優れているということである。例えば EU 主催のイベントの途中で、言語の問題でビザが却下され、CSW のような国際会議の場に立つ権利すら得られなかった、草の根アクティビストの存在を強く訴えた女性、アフリカの農村地帯における女性農家の政治参画を成し遂げた女性、グテーレス総長出席のタウンホールミーティングにて、ガザの人道危機を非難し、拍手を送った方達。私が目撃したのは、登壇者や参加者問わず、受け身ではなく、常に発信側に立つ CSW の参加者だった。これは、参加した会議が始まる前日の、バッジを回収する時に国連本部を訪れた時にも感じた。たまたま合流した他団体の日本人の方と一緒に写真撮影をしようとした横から他国の NGO 代表団が生き生きと動画発信を始める。若干動揺したが、彼女らの目には希望と熱意の眼差しが伺えたのである。



【会期中で印象に残った出来事】

印象に残った出来事は些細ながらたくさんある。主に個人的な CSW の経験からと、正式な日本代表とのブリーフィングにわけて共有する。

会期中、様々な参加者と会話できた。例えばパスを取るために行列に並んだ際、ニュージャージーから来た女性の方とお話した。彼女は医療従事者で、アメリカの公衆衛生の問題に強い関心を持っている。アクセスが不平等であったり、それが経済的や社会的な要因から生まれることを教えてくれた。サイドイベントに登壇されるということだったが、都合が合わず行けなかった。何かの機会でもた連絡したいと思う。タウンホールミーティングのチケットを受け取る時も、別の医療従事者の方とお話しできた。CSW への参加は数回目だったらしく、タウンホールミーティングが前と比べて制度化していて安心したとのこと。因みに以前はチケットの配布もなく、自由に出入りできていたため大騒ぎになったとか。彼女と列に並んでいた時、後ろで列を割り込むようにバリケードを設置した男性が背後のビルから現れた。ビルの所有する土地だからどいてほしいと、かなりきつい言葉をかけた。すると、私たちの後ろにいた女性たちが言葉を投げ返すように、自分たちが並び立つ権利を主張したのが記憶に残っている。日本にいたらどうしていただろう。彼女の声かけによって、私の中にも反骨心が芽生えた気がする。理不尽に対抗する、その姿勢に感銘を受けた瞬間である。

対抗というテーマは国連外でも見受けられた。MET 美術館の地下トイレに並んでいた際に、あまりにも女性の列が長かったため、男性のトイレに並び始めた方がいた。しかし待っていた男性はほぼ反発することなく受け入れたのであった。我慢と仕方のなさの気風を感じる日本ではありえない光景だった。男性、女性の境界線が交わりつつあるからこそ、彼女の選択は阻まれなかっただろうと考えた。パレスチナ・イスラエルの抗議も忘れてはいけない。両方の支持者が国連前に押しかけ、相互にプロテストをし合った。ただ、両方で共通していたのは、国連の無機能性であり、あの、ガラス張りのビルに身を隠した、世界中の官僚への抗議だった。確かに国連内部に入れば、市民社会組織あるいは一部の指導者も同様に停戦を訴えているが、外には懐疑的な市民もいることから、一般社会との連帯がまだ達していないと感じた。

【まだ残る、課題】

最後に、日本代表のブリーフィングについてお話をしたい。一回目しか参加できなかったが、代表の方とお話しする貴重な機会なため、質問は絶対したいと思い、色々思考をめぐらせた。私は何を伝えたいのか。最終的に行き着いたのは CSW への若者の参画のあり方だった。国際会議とはいえ、全て平等な価値が与えられない。例えば COP などの気候変動に関する会合は日本からの派遣がある程度整っている。しかし、女性の会議はどうだろう。他に派遣された方とお話すると、滞在費や食費などはほとんど自己負担であった。私もなるべく抑えるために 10 枚のパンと一瓶のブルーベリージャムで五日間凌ぐことにした。ただ私は幸いながら様々のご支援をいただくことはできた。一方で、そうした知り合いやつてがないユースは、こうした国際の場に立つのは難しい。ビザが却下された女性たちのように、大海を挟んだこの日本でも、平等な若者の参画には程遠い現状が明らかである。

とはいえ、経済的支援だけが解決の鍵にはならないと思った。経済的支援は前提として、CSW のような機会に発言できることをより周知する必要がある。私も中高生の時にセクハラ問題に携わっていなかったら CSW の存在を知らなかっただろう。また、全国のあらゆる団体から派遣された私たちユース同士の連帯も強めなければならない。今年は交流会が何回か実施されたというもあり、派遣後も繋がっている。しかし、せつかくの経験やノウハウを次世代へと引き継がなければならない。こうした若者の責任も十分承知している。私はユースとして、政府とともに、国際の場で指揮を取る日本の女性のプレゼンスを盛り上げていきたい。